

『クレヴの奥方』における告白の意味

泉 敏 夫

『クレヴの奥方』における焦点はクレヴの奥方の夫に対する告白と、自由の身となった奥方が愛するヌムール公の求婚に対して行う拒絶の二つであろう。この試論においては終局における奥方の拒絶の必然性と密接につながることになる告白の内容を分析してその意義を捉えることを主題とする。

1

アンリ2世治世の雅びやかな宮廷に、シャルトル姫が出仕しはじめると、その〈完璧な美しさ〉¹で貴頭の宮廷人すべてを魅了し感嘆させた。やがて太守の家柄のクレヴ殿がシャルトル姫に恋をいだき求婚する。姫の母君シャルトル夫人は〈クレヴ殿なら威厳もあり人品もいいし、若さにも似ぬ思慮も見えている〉²とクレヴ殿との結婚に賛成する。姫は〈他の人たちの妻になるよりはあの人のほうが望ましくさえある、しかしあの方の人がらにべつに愛着を感じるわけではない〉³と答えながらも、母君の意向に従って結婚する。16歳である。婚約時代に〈クレヴ殿はうれしかったがすっかり幸福というのではなかった。それは姫君のほうの気持が敬意と感謝の程度を一步も出ないで、それで心の底にもっとはげしい気持がかくされているとも殿には思われないのである〉⁴との殿の満されぬ気持は結婚後も変わらない。一方〈まったく自然のつくった傑作とっていいくらいの人〉⁵と噂され、〈稀世の勇気と、機知のなかにも容顔や動作のひとつひとつにも絶えずみなぎっている独特の愛嬌〉⁶と〈ふしぎな魅力を人がらにそなえていた〉⁷ヌムール公は、王室の舞踏会において、クレヴの奥方に初対面することになったが、その時〈奥方の美貌にすっかり打たれてしまったヌムール公は、近づいてあいさつしながらも嘆賞の気持をあらわに顔に浮べ〉⁸ることになった。クレヴの奥方も〈ヌムール公のえも言われぬ容姿や態度の美しさに〉⁹ますます感嘆する。しかしヌムール公は自分の恋を世に隠し心のうちにつつまおこそうと思ひ、クレヴの奥方も彼に対する恋心を、何事でも打明けてきた母君にさえもらさず黙っていた。しかし母君は娘の公に対する好意を見抜いていたのである。慎み深い二人は相手に恋を積極的に打明けようとしなが、宮廷の行事や生活における二人の挙作の中でお互いが好意をもち合っていることが分かる。とくにクレヴの奥方の母君の病状が重くなったとき、ヌムール公が見舞いに來たが、そのたびに奥方は〈会うのはやはり楽しみ〉¹⁰と思ひ、ヌムール公の不在の場合、〈姿を見て魅力を感じるのものはもの狂わしい恋の始めなのだ〉¹¹と考えて苦しむこともある。このような内的な情念の高まりをさらに掻きたてる外的状況がつきつきと起る。もともとヌムール公と英国の女王との結婚が取沙汰されていたが、その可能性が薄らいだこと、また公の恋の対象が皇太子妃ではないことが明らかになったこと、

このような奥方の陥る危険を守る条件が一つ一つ消えてゆき、また皇太子妃の部屋でヌムール公が奥方の肖像画を盗む事件を通して、公の愛の確証をつかむ。つづいて手紙事件が起る。これは宮中で庭球戯が競われた際、貴人よりこぼれ落ちた手紙が、ヌムール公宛らしいと皇太子妃より告げられたが、その内容は、男の浮気心を許すことができないという非難と決別の宣告であった。クレーヴの奥方は衝撃をうけ、〈堪えきれない苦痛〉¹²を感じたが、その落し主が公ではなく伯父シャルトル侯であると分かり疑いもとける。シャルトル侯から、その手紙が自分宛だと発覚すると王妃の失寵を招くことになるから、偽装に協力してほしいと懇願されると、クレーヴ殿、ヌムール公とともにシャルトル侯の急場を救うべく相談する。このとき奥方は〈ただヌムール侯に会っている喜びだけを感じていればよかった。いままでに覚えたことのない純粋なまじりつけのない喜びだった〉¹³のである。しかし奥方は、前夜の〈堪えきれない苦痛〉から〈純粋なまじりつけのない喜び〉への豹変、胸を刺さんばかりの嫉妬から喜びへの急転という、おのが心の不安定さ、はかなさを思い知らされた。もうこの上はヌムール公と会う機会を与える宮廷から遠去かるほかはないと強く感じ、田舎への隠退をクレーヴ殿に頼むことを決心する。それには理由を述べねばならぬことを覚悟する。奥方の気持は告白へ一歩一歩向うのである。この行為には勇気が要するであろう。その勇気を支える二つの条件をラ・ファイエット夫人は伏線として設定している。まず一つは、クレーヴ殿の性格の冷静さと考え方が寛容であることが、たとい夫に妻が自身の口から他の男性を愛していると告白しても受け入れてくれるであろうと、妻に希望をいだかせたことである。かつてトゥールノン夫人事件の際、クレーヴ殿は〈自分の恋人いや妻であってもだれか好きな人ができたと正直に告白してきたら、私はすこし悲しくはなるだろうが決してむきに腹を立てたりはしないつもりだ〉¹⁴と奥方に述べたことがある。他の一つは、色恋のもたらす不幸を説き、娘が〈あぶない懸崖のふちに立っている〉¹⁵と自覚をうながし、妻としての義務を果すため〈勇気と力をもつのですよ。宮廷からおさがりなさい〉¹⁶と強く戒めた母君の言葉である。

まず告白をめぐる諸研究家の見解を考察する。ベルナル・パンゴーはつぎのごとく解明している。奥方が自らの恋情を抑えることができず、しかもヌムール公と会えばますます情念を掻きたてられることから免がれない。「彼女がもはや自分自身の行為に責任をもつことができないところに達し、また逃れようと望んでも無駄である世界へ投げやられては、奥方には自分自身を守るため他の人に頼むしかない。唯一の道理にかなった逃走は外観の芝居を終わらせる告白である。」¹⁷とのべ、奥方の告白の冒頭の言葉〈あたしは今まで女が夫にしたこともない告白をあなたにこれからいたします。あたしの行為と気持の潔白なことがあたしにその勇気をあたえてくれますから〉を引用し、この驚くべき決心が誠実さのあかしであると強調するクレーヴの奥方の心情を批判し、「この完全な誠実さの、また相互に惜しみない信頼の時はずっとも大きな欺瞞の時でもある」¹⁸とのべ、さらに「平静に戻ろうとする告白はそれへの復帰の不可能を明白にするばかりである」¹⁹とし、また「告白に英雄主義的でロマネスク風の思いがけぬ劇の運びを見ることは告白の意味を取りあやまることになるだろう」²⁰とコルネイユ的世界からのへだたりを指摘したあとで、「クレーヴの奥方はポーリーヌではない。悲劇『ポリュー

クト』²¹の風土からラ・ファイエット夫人の小説のそれまでのへだたりは遠い。告白は、それを正当化するモラルと同じく曖昧である。それは明晰さに過ぎない²²と告白自体が奥方の無力の証明と評している。

ロジェ・フランシオンは「たしかに奥方は自らを正当化し自らの心をごまかそうとしてつぎのように宣言する。彼女の告白は〈決して弱気からしたのではなくって、ああいうことはかくそうとするより真実を言おうとするほうによけい勇気がいるのですから〉と。事実、その時彼女は矛盾している。彼女は夫の詰問にせかれてこそこのような行為を決心するのである。告白のシーンのあいだ、彼女のふるまいのすべては深い戸惑いと、少し前母君に見出していたであろう支えを夫に求める必要性からなされたものである。あわれみと許しへの訴え、涙そして打ちひしがれた態度、すべては意気鎮沈と戦いの拒絶である。」²³

以上のようにロジェ・フランシオンはベルナール・パンゴールと同じく、奥方が誠実の名のもとに勇気ある行為と気負った告白は、自己欺瞞にはかならず、実は自己の弱さの表明となすべき策を失った失意状態の結果と解している。

アラン・ニデルストによれば、「恐らく告白はクレーヴの奥方が彼女の心情に反して投じた絶望的な戦いの避け得ない到達点であった。しかしラ・ファイエット夫人はコルネイユのそれとまさに対照的な結論に至っている。この稀有の救済策はそれがたとい英雄主義的であろうと不幸を深めるばかりである。困難が一瞬でも明徴と勇気によって乗り越えられるためには人間の本性はあまりにも弱く、人生はあまりにも複雑である。よって告白は罰せられる。疑いもなくそれは称讃すべきものであった。しかし現実はいかにも美しい行為に堪えられない。奥方の誠実は恐らく美德であるが、世においてはいかにも危険である。」²⁴とのべ、上記二者の見解と異なり、告白自体のもつ誠実さと英雄主義を認めている。そして作品のもつ美しさをそこに見出し、さらにアラン・ニデルストは続けて「『クレーヴの奥方』を読みながら、われわれは2人の恋人の歎きにわれわれを結びつけ、彼らを酷い運命の無垢の犠牲者と見做し、ヒロインの厳しい勇気を讃えなければならぬであろうか。事実われわれはこのような感情のいずれも味わうことは可能である。ここに小説の多義性があり、ここにもっとも深い作品の美しさがある」²⁵と強調する。

アラン・ニデルストが、クレーヴの奥方の告白は自らの情念の高まりに抗って、たとい絶望的であろうと、情念からの救済を図る戦いとして位置づけた点において、上記二者の分析とは異っている。何故ならば、ニデルストは、たしかに人間の人間に対する告白は罰せられる宿命を担っているが、それは人間性の弱さに基づくからと指摘しながらも、奥方の行為そのものの意図の健気さに注目しているからである。

ジャン・アンソーム・クライターは、告白の直接の動機は夫に「彼女が宮廷から離れることの同意を得ることである」²⁶と明確に示しながら、奥方の告白に表われた仮面性をあばいている。「奥方の意識の同じ二重性は輝やかなしい幻影を育てる。何故ならば、自分の恋心を抑えるための相継ぐ失敗にもかかわらず、同性と等しく不完全で弱く誘惑に屈しがちな奥方は自らを一般とは異なりすぐれた存在と見做しはじめる。彼女の動機は、昇華された外観の下に示さ

れ、彼女のつぎつぎに迎えるであろう戦いに新しい目標を供する。告白の場合は個人の不誠実と、自らを欺き他をも欺く傾向の好例を作品に与えている」²⁷とべているが、この解釈は、自己を昇華し勇氣ある存在として振舞うことによって、自己に対しても他に対しても不誠実な行為として告白を理解するもので、ロジェ・フランションやベルナル・パンゴーと同系譜に属すると考えられる。

ジョルジュ・プーレは、情念のショックで平静を失った魂に愛がはいりこんだ時から、愛は魂を一度にすべて所有したがるようであると一般的な愛と魂の関係を論じたあとで、つぎのように作品の特徴を指摘する。

『クレーヴの奥方』は進行の物語りであって、情念自体のそれではなく、情念が心情に継起的にもたらす諸体験のそれであり、情念が精神に継行的に行わしめる諸発見である。この二つの進行が明確な形で示され、それぞれの特色は心情の動きの精神のそれに対する優位を示すとプーレは述べる。さらに、以上の進行と同時的に、他の認識つまり他の一連の発見がある。それは情念の力の認識とともに、存在が情念と対面した時に味わう無力感を知ることである。つまりもはや愛することができない、自らの感情を制御できない等を認識することであると、クレーヴの奥方が自らの情念との対決においていく無力感を分析し、彼女は段階的に非情な路を辿り、とどまる毎に苦い驚きを感じ、情念は毎回悲しくも新しい現実として現われ、ついに存在は新しい段階毎に自分自身に対して不実となる。その結果自失状態を招いたのであるとプーレは述べる。彼によれば、クレーヴの奥方にはただ一つの路しか残っていない。

「最後の救いが残っている。英雄的告白によって、離れようとする自己把握と管理を他人の手に委ねることである。

〈あたしの日常を監督して、だれにも会わないでいいようにしてくださること、お願いしたいのはただそれだけです。〉

ああ、一途の服従によってであれ、他の隷属の形と引きかえであれ、真に生きるこの自我の連続性と自我への誠実さ、瞬間の混乱ではなくしてはかない一貫性をこのようにして取戻すことができるとは！

このころみの失敗のあとではもはや避けられない破滅と結末しかない。」²⁸

プーレは、奥方のころみが仮令失敗しても、奥方の自我の連続性と自我への誠実さを取戻そうとした行為として告白を捉えようとしている。

以上、諸研究家の告白に関する解釈を考察してきたが、これらに対するわれわれの意見は3において後述するとして、告白という行為は愛の特質と宿命的に結びついているものであるから告白に関する分析の前提として愛の特質について考えてみたい。

2

ヌムール公は〈クレーヴの奥方という人は公にはもうたぐいもなくりっぱな人に思われるから、自分の恋は世間の人に知られるよりおとなしく心のうちにつつんでおきたかった〉²⁹と、恋が芽生えた頃はそれを隠したいという気持が勝っていた。というのは公の愛が深く、奥方か

ら尊敬されたいがためである。愛に名与が交っていることに注目したい。しかし同じ人物が、たまたま告白シーンを立ち聴きしたあとで、たとえ第三者のことだがと断わり、かつ口外しないことを頼みながらも、その熱っぽい話し振りのため相手（シャルトル侯）にヌムール公のことだと察知されるほどに〈愛されるねうちのある人を恋している幸福をことさら誇張して話した〉³⁰のである。つまり愛には隠したいという欲求と知られたい欲求とが矛盾した形で共存しているというべきであろう。そして後者の場合にはとくに〈愛されるねうちのある人〉を愛しまた愛されているという名誉心と幸福感がその欲求の根源にある。ベルナル・パンゴーは、恋する人間がその愛を明らかにしたい、知られたいと欲求をもつものとして、その理由をつぎのごとく分析している。「…愛が名誉をそそのかすが故に、愛は同時に知られることを望む。ヌムールの控え目はもともと模範的であるほどなのに、たまたま彼が聞き及んだクレヴの奥方と夫との間に交わされた会話の中味を親友に語る喜びに抗し得ない。その上恋にのぼせた人間はその愛を語るに甘美さを味わう。この秘密はまこと重大で保つことは困難である。なぜなら秘密は他者の不断の好奇心にさらされており、同時に凡そ情念（恋情）というものは少くとも人に、つまり愛する対象に明らかに示されてこそ燃えるものなのである」³¹と。

われわれは、パンゴーの愛の解明の中で、情念が人（他者）に明らかにされることによって燃えるという点に注目し、それをさらに究明したい。

本来、愛は相手との合一を望むものであり、そこに幸福がある。しかしながら、ヌムール公の場合、パンゴーが「他者の視線にとりつかれたヌムール公は冷酷な二者択一の状態に置かれている、黙して何も望まぬべきか、それとも話して愛する人を危険に走らせるか」³²とのべているように、苦しい立場に置かれているのである。それ故、前述のように、〈自分の恋は世間の人に知られるよりおとなしく心のうちにつつんでおきたかった〉³³。われわれはこの選択を17世紀社会における他者の視線をおもんばかつての行為であることを知るべきであろう。相手の尊敬を失わないよう心掛けるということは、他人の視線によって、クレヴの奥方の宮廷における評価を落すことに繋がるような粗野なふるまいを避けるということである。ここに17世紀社会の閉鎖性が見出せるが、ラ・ファイエット夫人はそれを的確に浮き彫りにしている。と同時に、このような閉鎖的社会における人間の自然らしさを、鋭い人間観察によってわれわれに垣間みせてくれる。たとえば落馬事件でギーズの若殿に自らの思慕を見破られた時、奥方は後悔したが、他方〈ヌムール公に知られたこともやはりせつなかったが、しかしこのほうの苦痛はつらいものだけのものでなくて、どこか甘い気持ちさえまじっているように思われた。〉³⁴同じ発覚であっても、それがもたらす心情は両者それぞれ異なる。

手紙事件のためヌムール公と同じ部屋で伯父の窮場を救う策を練っていた時、奥方は〈ただヌムール公に会っているよろこびだけを感じていればよかった。いままでに覚えたことのない純粋なまじりつけのない喜びだった。〉³⁵社会の桎梏、夫への配慮、前夜の苦痛など一切を放念し、ただ愛する人を同席できる喜びに浸っている無垢の16歳の女性が前述の落馬事件の時と同じく自然のまま描かれているというべきか。

夫クレヴ殿が亡くなり、もはや妻としての義務を守ることが社会通念として免がれた時、

想念として〈結婚してもいいように思〉³⁶い、また〈自分のひそかに願っている幸福〉³⁷を求める時もある。もちろん前者については直ちに〈不貞なことを想像するだけでもけがらわしい気〉³⁸になり、後者についてもそれとは逆の方向に反省して〈弱い気持をむちうとうとする〉³⁹のであるが、とにかくヒロインの率直さが自然のまま描かれている。さらに奥方は公に会わないと決心するが、〈この決心は理性と貞操からわり出されたものであるから、奥方の心情まで引きずっていく力はないのである。心はもとどおりヌムール公に結びついてしまっている〉⁴⁰と注釈されている。このラ・ファイエット夫人の注釈の特徴は、理性と心情を区別しているということ、しかも心情の力の愛における優位を示している点に、17世紀を越えた考え方がうかがわれる。

さて情念が他者に明らかにされることによってそれだけ燃えるという愛の特質はクレヴの奥方の場合にも現われる。

奥方はすすんで自らの恋を明らかにしないだろう。しかしそれはおのずからしみ出し、相手に伝わることになる。相手は即座に反応を示すが、このことによって自分の心情を相手が見抜いたということを察知した彼女の恋は一層深まる。例えば、サン＝タンダレ大將の招宴の場合、奥方が夜会に行かない理由は、ヌムール公が自分の恋人が舞踏会へ行くのは嫌であるという考えを知ったからである。しかしそれにもかかわらず、表向きの理由はサン＝タンダレ大將の思わせぶりな親切の押しつけを避けるためとしたが、彼女自身ひそかに、招宴に応じないことによってヌムール公を喜ばすための道徳的理由ができたことを喜ぶ。この場合、奥方は明晰にヌムール公を喜ばすことを望むと同時に自分の気持を伝えようと意志しているのである。

肖像事件についても同じ心情の動きが認められる。ヌムール公が皇太子妃の部屋で奥方の小肖像を盗む、彼女はそれを見抜くと同時に公と目を交わすことになる。奥方の理性はその盗みを暴露するよう命令するが、彼女は衆人の前で公の恋をあばくことを嫌い、沈黙を守るが、このふるまいによって自分の好意を相手に伝えることになる。

それに自分は知らぬ体にして、むこうにひとつ好意のしるしをあたえるのは奥方もいやでないことであった。奥方の当惑とほぼその理由も察したヌムール公は近づいて低い声でささやいた⁴¹。

以上のように奥方の心情には相手に自らの恋を伝えたいという意志がはたらいっている。しかも奥方には自らの意識、心情を実に明晰に眺めているのである。

ジャンン・アンソーム・クライターは、「クレヴの奥方が戦いに身を投じているあいだ、彼女の感情は彼女自身の意識によって彼女に隠されている。この意識は一方が愛、他方が名誉という彼女の戦いを煽ぎたてる二つの情熱的至上命令にかわるがわる加担している」⁴²と述べ、彼女の感情が意識によって隠されている例としてサン＝タンダレ大將招宴辞退、肖像事件、手紙事件の三つの挿話を引いているが、われわれはクライターの意見には承服しがたい。すでに分析したように、招宴辞退の場合、奥方の喜びはヌムール公を喜ばすことに繋がっており、明瞭に意識している。肖像事件においては、公の名誉を守っているかのごとき外見をとろうとも、〈それに自分は知らぬ体にして、むこうにひとつ好意のしるしをあたえるのは奥方もいやでな

いことであった)⁴³と考へ、共犯意識の甘美さに浸っている。手紙事件においても、〈会っている喜びだけを感じていればよかった)⁴⁴のであつて、伯父シャルトル侯の救済のためという大義名分は口実に過ぎないことを自ら熟知している。

以上から、クライターが「彼女の感情は彼女自身の意識によって彼女に隠されている」とは結論できないのではなからうか。奥方はこのようにして、自らの恋情を公に露にして行き、ますます公に近づき公が奥方に近づく因を作つて行くのである。以上のふるまひは至極消極的であるとはいえ、愛の合一を願うつましやかな行為にはかならず、愛の特質である自我の拡大化であり、客観化である。しかし17世紀社会という枠の中で自我の拡大化は限定され抑制されている。その故に、奥方は愛のしるしの外化を恐れるのである。アルバ公が来仏の数日前、馬場でヌムール公が落馬した事件では、奥方の思はず示したただならぬ狼狽と心配によって、ヌムール公に彼女の公に対する思慕の念を伝えることになった。他方ギーズの若殿にも奥方の心情が見抜かれた時、奥方は〈他人に気づかれたという後悔〉に責められた。しかしヌムール公については〈苦痛はつらいだけのものではなくて、どこか甘い気持ちさえまじっているように思われた〉のである。〈後悔〉は世間つまり他者の視線を恐れたものであり、はじらいである。〈甘い気持ち〉は奥方の心情の自然らしさを示している。つまり自我の拡大化による幸福感に浸るのである。しかしここで注意したいのは、ギーズの若殿に対する奥方の心情は〈後悔〉として示されているが、これははじらいとも、その実は嫌ではなかつたと考えられる。なぜならば、若殿に看破されても、それを即座に打消そうとも隠蔽しようともこころみなかつた。好奇心と隠謀の渦巻く宮廷において、皇太子妃の血縁にあたるギーズの若殿に気付かれたにしては妙である。またその後物語の進行の中において、ラ・ファイエット夫人は、若殿が失恋の傷手を野心で癒すべくロード島奪取計画を立てている最中、死亡という設定で舞台より退場させているが、彼の死までの期間、彼にヌムール公への思慕の情の証拠を握られていることに対する、奥方の気懸りが何ら示されていないし、また若殿から宮廷にその噂が流れる可能性をはらんだ宮廷の反応についても触れられていない。ということは、この事件が奥方の心情に新たな安定感をもたらす要因となつたからであると言えよう。この安定感が気懸りと後悔を凌いだからであると考えられる。

さて、この自我の拡大化は自我の社会化に進み、さらに自我は安定し、愛は深くなる。奥方が母君に自分の胸のうちに秘めていた公への恋心を打明けようとした直接の動機は、母君が娘の気持ちをすでに明察しながら、将来を案じ、公が皇太子妃にひかされている噂を強調したり、公を〈女との交際をただ快樂と考へて真剣な愛情を感じないらしい)⁴⁵などと貶すことによって、娘の恋情を抑えようとしたために、かえつて奥方のヌムール公に抱いている好意を自分自身はつきり自覚したところにある。この自覚が根底にあつて彼女をして母君に打明ける決心へと促したのである。〈ヌムール公に対して自分を守るために母君に頼らねばならぬと思つていた期待のはずれた落胆もあつたのだ。自分の心を制御する自信のないわが身をあわれみ力づけてくれる人のせひともほしいこつう時に孤独になつたことが悲しまれてならないのである)⁴⁶と作者は注釈しているが、母君が奥方を〈孤独〉から救ひ、彼女の自我の社会化を助ける役割を

果そうとしていた。しかしこの社会化は母君の死によって旬日を出でずして霧散してしまう。

愛における自我の社会化欲求は愛するものにとって自我確立のための重要なはたらきであるが、これが愛を失う場合には逆の作用を引き起す。

奥方から告白をうけたクレーヴ殿は〈あなたが私に見せてくれた信頼と誠実さはこの上なくとうといものです。あなたはそういう告白をしても私が決してそれを悪用したりする人間でないと感じてくれた。そのとおりです、私は決して悪用はしないし、これで私の愛情がかわりはありません〉⁴⁷と答え、一方クレーヴの奥方においては〈殿が奥方にしめした信頼はますます奥方をヌムール公に対して堅固にし、どんな束縛をあたえたよりもっと厳しい決意をさせてしまった〉⁴⁸のである。このように外見はおさまっているように見えても奥方は〈深い憂愁の色〉⁴⁹を隠しきれず、他方クレーヴ殿は相手の名前を執拗に求めつづける。そしてついにあえて鎌をかけてまでヌムール公であるということをつきとめる。クレーヴ殿は〈わかった結果でかえって苦しんでいる。天罰ですよ〉⁵⁰と奥方に言い、〈どうか、あなた自身の身のためにもしっかりしてください。そして、できたら私のためにもね。私は夫としてそういうことを要求するのでなく、あなたによってのみ幸福を感じている男、あなたの好いているその人よりもっと優しいはげしい愛情をあなたにもっている男としてそういうんですよ〉⁵¹と奥方を励まし、自らの深い愛を彼女に訴える。この段階では殿は、まだ奥方の公に対する恋心を公が知っていることを悟ってはいない。

しかしながら、告白のシーンのあと、公がシャルトル侯に洩らした内容は、シャルトル侯からマルティエグ夫人に伝わり、やがて皇太子妃の耳にはいり宮中に広まることになる。そしてついにはクレーヴ殿に達する。彼は絶望的な身振で声をあげた〈なんですって。ヌムールさんがあなたがあのひとを恋していることを、それじゃ知っているのですか。そして私がその恋を打ち明けられていることも知っている〉⁵²。この事実は奥方の告白よりも大きな衝撃を殿に与えた。ラ・ファイエット夫人はつぎのように殿の心を解き明かしている。〈しかしとにかく殿の心にはげしい痛みを覚えさせるのは、この秘密が他の人間に知られていて、やがてほうぼうにひろまるであろうということであった〉⁵³。ベルナル・パンゴーは厳肅な告白という行為が外観の社会においていかに取扱われるかをつぎのように的確に解明している。

告白はまた術策の基盤の上になりたつ社会の慣行を打ち破るための努力である。しかしこの努力は事前にその非が明らかにされている。この告白は、なされるや否や、それ自体関心をもった人々の解釈にさらされるのである⁵⁴。

いずれにせよ、殿は〈はてしもない煩悶と不安〉⁵⁵の末、一つの決断をする。つまり事実を〈作り話しだというふうに世間に示すこと〉⁵⁶そして〈厳格な冷淡な態度でヌムールに対応すること〉⁵⁷によりこの評判をもみ消してしまうことを奥方に命ずる。

このように、公が奥方の思慕の情を悟り、その上世間にも知られているということは、奥方の心の中のみそれが留まっているのと状況が異なり、一度に社会化されたことを意味し、殿自身〈勇気もどこかへ消えてしまった。こんなに名誉も自尊心もきずつけられた事がらに、むしろやせがまん勇気などもつべきでないような気さえした〉⁵⁸と失意もはげしい。殿にとって

は、奥方の愛を失うと同じだけ、いやそれにもまして宮廷における名誉の失墜が苦痛なのである。恋を失うものにとっては、それがひとたび社会化された場合、飛躍的な変化により自尊心をも失い名誉も傷けられ自失の状態になるさまがよく描かれている。ラ・ファイエット夫人の心理分析の冴えている証拠であろう。ここで、われわれは『アドルフ』における、主人公の第三者への告白の意味についてのバンジャマン・コンスタンの注釈を想起する。アドルフはそれまで誰にもエレノールを〈愛していない〉⁵⁹と言ったことはなかった。しかし第八章でエレノールの女友達に、エレノールに対して献身と憐れみをいただいていることは事実であるが、これは義務としてであって愛からではないと打明けるのである。しかし女友達に白状することによって、〈この事実が…一層現実性と力を擁して私に現われた。他人に知られなかった当事者同志の間の隠れた襞を第三者に突如曝け出すということは、重大な一歩である。取り返しのつかない一歩である〉⁶⁰と作者は述べるが、このあと、エレノールは二人の仲が第三者に知れ亘ったことを知り、〈全く自制を失い〉二人の関係は一挙に破局へ向う。

愛の特質をさきに考察したように、愛は相手との合一を望みながら、〈愛されるねうちのある人〉を愛した相手に愛されることを喜びとするが、それと同時に愛の社会化による愛の確立を願う欲求がある。ヌムール公の場合奥方に愛されている喜びを親友シャルトル侯に洩らしたが、この行為は愛の社会化を意味し、それによって飛躍的に愛は現実性を帯び、幸福感は深まった。しかしながら、クレーヴ殿の場合は対照的であり、愛に欠けている関係が、当事者同志の内輪のものであれば、辛じて信頼と理性によって維持されていたが、その痛ましい仲が世間に広まったという新しい局面を迎え、殿は混乱に陥る。エレノールの場合と同じく、社会化され名誉までおとしめられたからである。愛の場合における自我の確立に反して自我の否定に結びつく。

3

愛は本質的に自我の拡大つまり社会化を欲求するものであり、自己の内奥に秘め通すことはできない。この角度から奥方の告白の意義について考察する。

いかなる内容の告白であれ、告白は切羽詰った行為である。しかし告白という劇的行為は突発的に生じるものでなく、それを導きそこまで高めていく過程であろう。最期の実行まで幾度か奥方は決心する。

イギリスの女王との結婚という大野心をヌムール公が捨てたという噂が宮廷に流れてから、間もなくして奥方は彼から〈なおそれ以上に男の真実の愛情を示すと思うのは、その男の人がらが以前とすっかり変わってしまうことでしょう〉⁶¹と言われ、〈クレーヴの奥方にはこの言葉のなかで自分を的にしていることが容易にわかる〉⁶²のであった。このようにして公は〈自分の恋をはっきり奥方の心に刻みつけた〉⁶³のであるが、奥方は公に引きつけられる気持が高まるのを覚えると共に、その危険を防ぐには公に会わないようにすることしかないと考え、宮廷の義務を避けようとした。しかしクレーヴ殿は〈妻が日常生活を変えることに賛成しなかった〉⁶⁴。そこで奥方はヌムール公の恋の噂が広がっていることを殿に訴え、危険のはらむ宮

廷生活よりのがれようとした。

つぎに告白の決心をするのは肖像事件のあと、〈ヌムール公にこちらも好意をもっていることを明瞭にしめす⁶⁵〉危険を感じた奥方はこのことを殿に〈思いきって打明けてしまうべきだ⁶⁶〉と思う。

やがて、陛下や宮廷人たちが庭球戯を競った際、ある貴人から一通の手紙がこぼれ落ちたが、この内容は男の不実を責め決別の宣告に関わるものであった。皇太子妃からこの手紙はヌムール公宛のものに違いないと告げられ、奥方ははかりしれない打撃をうけ〈堪えきれない苦痛〉に陥る。この時奥方は〈夫の意志にそむいてでも社交界からしりぞくか、自分のヌムール公を恋しはじめたことをいっそ告白してしまう、そのどちらかをなぜ早くしてしまわなかったのか⁶⁷〉と悔いるわけである。以上、告白の決心の生じる状況を追ってみれば、奥方の恋情がその都度深くなってゆくことに気付き（手紙事件においては〈嫉妬〉として現われる）、もはや自分の心情を制し得ないことを知ったがため、公にもう会わないことによってしか自分を救い得ないから、宮廷から退きたいと一途に思う時、告白への衝動が現われるようである。看過し得ないことは、告白の決心をする時、奥方の恋情が高ぶっている状態にあることである。

以上のように奥方の心の中に醸成されつつあった告白への決心は手紙事件が契機となりついに実行されることになる。

前述のように、同事件で奥方は〈猜疑心や嫉妬のあたえるほんとうの不安〉をはじめて体験した、しかもこの〈猜疑心や嫉妬の気持がやはり消えてしまわない〉ことを痛感した、それに公の将来に起り得る心変わりの可能性に思いを馳せ、愛の絶対不信をいただいた。しかし一夜あけて、ヌムール公の潔白が判ったあと、ヌムール公と過した時、〈いままで覚えたことのない純粋なまじりつけのない喜び〉を感じたものの、このような自分の心の急変に気付き、いかに心が不安定であるか思い知らされた。かくなってはヌムール公と会わないために宮廷を遠去かるほかはないと、夫に願い、弱い自分の庇護を頼むために告白することになる。

つまり、愛の不信、しかし自らの愛については不変の確信、この矛盾の中で相対的な愛の世界から絶対的な愛の世界への逃避欲求、これを支える宮廷より隠退願望、これらが告白を促したと考えたい。告白の解釈について1で述べたように、ベルナール・バンゴーによれば、「自分自身を守るため他の人に頼む」ことであり、告白がいかに英雄的に見えようと「無力の証明」として捉えられており、同じくロジェ・フランシヨンも、奥方が夫に対して誠実に尽すという貞節を正面に掲げて、自ら勇気ある行為としたいこんだ告白は、自己欺瞞に過ぎないと述べたあと、その本質は自らの弱さの表現であり、自分の庇護を殿に懇願したものであると指摘している。

しかしながら、われわれは、告白の意味がはたして、クレーヴの奥方の弱さの表現に尽きるかどうかを解明しなければならない。

まず、奥方のおかれた状況で、数々の選択の路があろう。第一の路。愛に対する不信があろうと、自分自身の弱さと不安定を自覚した以上、また色恋のもたらす不幸を説いた母君の戒めを忠実に守り、夫の自分に対する信頼と敬意に恵まれながら、ヌムールへの愛を諦め、魅力あ

り美德の鑑として宮廷に伺候できたであろうに。第二の路。安易に誘惑に屈し、自己を墮することもできたであろう。第三の路。スタンダールの述べるごとく「毅然として」⁶⁸幸福に進むこともできたであろう。奥方はいずれの路をも選ばなかった。第一の路を選ばなかったのは、奥方はヌムール公を諦めることができないであろうと明晰に見通していた。この事実は物語の展開のなかで明白である。告白のあとでさえ、公の妹から手に入れた公の杖に、公の使用したりボンと同じ色のリボンをつけ、そして壁絵に描かれた公の肖像を〈恋しいひとを見るときのおっとりしたようす〉⁶⁹で眺めている。また数か月のうち、小さな森の四阿で横たわり物思いにふけているヌムール公の姿をたまたま奥方が見掛けた時、彼と目も言葉も交わさずとも〈心のなかに眠っていた恋の火がまた燃えついて、そのはげしさは普通ではなかった〉⁷⁰と、尋常ではない奥方の心情が描かれている。そして、ついに最後となる二人の対話で〈あなたにもっているあたくしの気持は一生変わらないもので、たとえあたしがどうしようとたぶん消えないものだということを信じて下さいまし〉⁷¹と奥方ははっきりと打明けるのである。

第二、第三の路は他人の視線が槍のように四方から襲い外観で成り立っている17世紀宮廷生活で、まして夫への貞節を絶対とする奥方にとっては絵空事に過ぎない。

この上は第四の路しか残らない。宮廷から隠退することである。しかし困難である。何故ならば夫が許さないからである。夫は外観の世界を絶対として生きなければならぬからである。田舎への隠遁は奥方にとって内的自由を許してくれる最後の牙城である。そこで彼女は正確には半告白（相手の名を秘めて）し、隠退の意志の強固なことを示しながら夫に嘆願するのである。夫婦生活における夫の権威について、フランソワ・ルブランは、『アンシヤン・レジームにおける夫婦生活』においてつぎのごとく述べている。

聖パウロと聖オガスチン以来、教会の教えは、部分的に、慣習法にしる成文法にしる、家族の中心にあって十全な権威を保持している夫に対する妻の従属に関するフランス法の掟を導いた⁷²。

奥方は懸命に時代の慣習に従ったことが理解できる。

ロジェ・フランシオンは告白の解釈として、

その上、奥方が自ら非難する第二のあやまち、すなわちラ・ファイエット夫人が注釈するように（〈しかし奥方に何よりも堪えがたいこと〉）、はるかに重要なことは、前夜彼女をとらえた酷い経験である。その時にはもはや夫婦の義務も、彼女をやさしく愛する夫への敬意、社会的禁忌も、自分の大切な評価を失うことへの恥も問題ではない。問題なのは愛ととりわけその持続である。奥方はこのようにして他の世界にうつり、義務の名において愛を拒否するのではなく、愛自体の名において愛を拒否するのである。彼女の嫉妬はもはや現在や過去の状況ではたらいっているのではなく、未来においてである。彼女がこの愛を逃れようとするのは、それが本質的に不安定だからである⁷³。

と述べている。

この解明は、愛の不安定を未来にまで見通し、愛自体の名において愛を拒絶したところに告白の意義を認めようとしているが、モーリス・ルヴェはフランシオンと同じ立場に立ちながら、

理想とする公の愛のイメージを守るため、現実の愛を諦めたのであると述べている。この解釈は奥方の公の求婚に対する拒絶の理由に関わるものであるが、われわれは、奥方の拒絶の行為は告白の必然的結果生じたものであると見做す⁷⁴が故に引用したい。

さて前代未開の逆説によって、クレーヴの奥方が彼女の愛する人を諦めるのは、まさにこの恋情を持続の中に定着するためである。この愛の生成自体、拒絶の瞬間に逆流し、消滅し、結晶することだろう。現実のヌムールを失うことは、疑いなくそのイメージをどこしえに傷けないまま保つためであり、とりわけ彼女自身失わないためである。この〈平穩〉の昇華、…ラ・ファイエット夫人が彼女のヒロインの酷い消去に与えようと欲した最後の意味がある⁷⁵。

ロジェ・フランシヨンやモーリス・ルヴェの述べるように、愛への不信から、現実の愛を諦め、とくにルヴェの解するごとく自らの内奥の世界でのみヌムールの愛を持続させようとするところに、告白の一つの意義があることは事実であろう。しかし、愛の不信はヌムール公の愛に関するものであって、厳密には奥方のヌムール公に対する愛は不変であり、未来も持続されるであろうことを明晰に奥方は意識していた。それだからこそ奥方は夫に告白したのである。夫の寛容を信じ込み、夫が告白によって痛烈な衝撃を受け、彼を取り返しのつかぬ不幸の淵に陥れるなどと16歳の若妻が予測できるはずはない。

1で分析したように、プーレは「存在が情念と対面した時に味わう無力感」を奥方が味わったと指摘しているが、むしろ告白自体に賭けた自我確立への欲求は存在の充実感を示すものであるとわれわれは考えたい。またプーレは「もはや愛することができない、自らの感情を制御できない」と述べているが、われわれは考察したように、奥方はヌムール公を愛しつづけ、明晰に告白の実行へとおもむいたのである。しかもこの自我の確立への欲求は後の公に対する拒絶の必然につながるものである。

われわれは愛の中に、自我の社会化というやむにやまれぬ欲求があることを考察した。奥方は自我の確立のために、とどまることも（思慕の情を自制する）、逃がれることも（隠遁する）できない状況の中で、夫の反応を恐れながらも、しかもあたかも母君に対するかのように〈あたしをかわいそうだと思って導いて行って下さい。そしてあなたにできることだったら、やはりあたしを愛してくださいまし〉⁷⁶と懇願しながらも勇気ある告白をしたのである。この嘆願の中に逆説的にはあるが明瞭に他のひとを愛していますという宣言が含まれていることを見落してはならないであろう。告白は奥方の弱さや敗北の表現ではなく、また自閉的防衛でもなく、むしろ主体的に自己の同一性を守ろうとする強い意志の表現と見るべきであろう。

われわれは、17世紀社会に一女性が自我の確立を願った勇気ある行為として、クレーヴの奥方の告白の意義を捉えたいのである。

注

- 1 M^{me} de Lafayette, *Romans et Nouvelles*, éd. p. 258.
- 3 Idem.
- 4 Idem.
- 5 Ibid., p. 243.
- 6 Idem.
- 7 Idem.
- 8 Ibid., pp. 361-262.
- 9 Ibid., p. 263.
- 10 Ibid., p. 277.
- 11 Idem.
- 12 Ibid., p. 310.
- 13 Ibid., p. 328.
- 14 Ibid., p. 284.
- 15 Idem.
- 16 Idem.
- 17 Bernard Pingaud, *M^{me} La Fayette*, Seuil, 1959, p. 99.
- 18 Idem.
- 19 Idem.
- 20 Ibid., p. 100.
- 21 *Polyeucte*, 1643, Pierre Corneille 作古典悲劇。

女主人公ポーリーヌは、夫であるアルメニアの貴族ポリュクトと昔の恋人、いまはローマ皇帝の寵を受けている騎士セヴェールへの恋情の板挟みになっている。ポーリーヌはキリスト教のために殉教しようとする夫ポリュクトから、セヴェールと幸わせに結ばれよと懇請されるが、それをはっきり拒む。他方恋敵のセヴェールは異教徒ポリュクトを救うべく努力する。このようにすべての人物が愛において、まず自己が相手に応わしい完全な人間であるようつとめる。相手によって讃美されねば真の愛人とは言えない。ここでは理性（義務）と情念とは、高貴な英雄的行為の中で統一されている。

『クレヴの奥方』においては、たしかに奥方は夫への義務とヌムール公への思慕の板挟みになっているが、夫への義務を果そうとする努力は、ヌムール公の愛人として応わしい人間になるためではない。一方ヌムール公は義務・理性の人というよりは、情念の人であって、クレヴ殿や奥方に、非難の打ちどころのない人物として称讃されたいと望む理性的追求はないといえる。またクレヴ殿は信頼するに足る夫であるが、奥方の他の男性に対する愛を知るや、絶望と嫉妬に陥り、名誉というよりは体面を重んじる男性一般と化してしまった。この試論で分析されるように、祖国愛・名誉・高潔・信仰に対するひたむきな求道によって相手の愛情を獲得しようとするコルネイクの英雄的行為は『クレヴの奥方』には見られない。しかしながら、各人物の私情の豊かさ自然さがリアルにうかがわれ、とくにクレヴの奥方の告白には近代的な意義が見出される。

- 22 Op. Cit., p. 100.
- 23 Roger Francillon, *L'Œuvre romanesque de Madame de La Fayette*, Librairie José Corti, 1973, p. 166.
- 24 Alain Niderst, *La Princesse de Clèves de Madame de Lafayette*, éd. Nizet, 1977, pp. 145-146.
- 25 Ibid., pp. 163-164.
- 26 Janine Anseume Kreiter, *Le Problème du Paraître dans l'Œuvre de M^{me} de Lafayette*, éd. Nizet, 1977, p. 177.
- 27 Ibid., p. 176.
- 28 Georges Poulet, *Etudes sur le temps humain*, Paris, Plon, 1950, pp. 122-132. in Maurice Laugaa, *Lec-*

tures de Madame de Lafayette, 1971, pp. 246-247.

- 29 Op. Cit., p. 269.
- 30 Ibid., p. 338.
- 31 Op. Cit., p. 88.
- 32 Idem.
- 33 Op. Cit., p. 269.
- 34 Ibid., p. 307.
- 35 Ibid., p. 328.
- 36 Ibid., p. 380.
- 37 Ibid., p. 381.
- 38 Idem.
- 39 Idem.
- 40 Idem.
- 41 Ibid., p. 302.
- 42 Op. Cit., pp. 174-175.
- 43 Op. Cit., p. 302.
- 44 Ibid., p. 328.
- 45 Ibid., p. 274.
- 46 Ibid., pp. 278-279.
- 47 Ibid., p. 334.
- 48 Ibid., p. 340.
- 49 Idem.
- 50 Ibid., p. 342.
- 51 Ibid., p. 342.
- 52 Ibid., p. 349.
- 53 Ibid., p. 350.
- 54 Op. Cit., p. 100.
- 55 Op. Cit., p. 350.
- 56 Idem.
- 57 Ibid., pp. 350-351.
- 58 Ibid., p. 350
- 59 Benjamin Constant, *Adolphe*, éd. Garnier Frères, 1950, p. 111.
- 60 Ibid., p. 112.
- 61 Op. Cit., p. 294.
- 62 Idem.
- 63 Ibid., p. 295.
- 64 Ibid., p. 296.
- 65 Ibid., p. 303.
- 66 Idem.
- 67 Ibid., p. 311.
- 68 Stendhal, *De l'amour, Chapitre, xxix, <Du Courage des Femmes>*

スタンダールは『恋愛論』第29章において「女性の不幸の一つは、勇気の証拠（恋と戦う女性の毅然としたふるまい）がつねに秘められたものであること、そしてほとんど公けに明かされないということである。それよりもさらに大きな不幸は、勇気がつねに、彼女たちの幸福に反して用いられることである。クレーヴの奥方は夫に何も言うことなく、ヌムール公に自らを投げ出すべきであった」と述べ、クレーヴの奥方の告白に対して批判的である。しかしわれわれは17世紀宮

廷社会という枠の中で、自我の確立のため毅然として告白を行ったクレヴの奥方に、勇気ある行為を見るのである。

69 Op. Cit., p. 367.

70 Ibid., p. 380.

71 Ibid., p. 389.

72 François Lebrun, *La Vie conjugale sous l'Ancien Régime*, Armand Colin, p. 78.

73 Op. Cit., pp. 165-166.

74 17世紀宮廷社会という特殊な状況の中で、奥方の夫に対する不易の貞節、それとあきらかに矛盾するヌムール公への愛の深さ、自己分析の明晰さ、理想追求の強い姿勢という諸特質をそなえた奥方には、自我の確立を得るために唯一残された勇気ある行為として、夫に対する告白しか残されていない。この観点から、拒絶も上記の条件、奥方の諸特質から必然的に生じた同じく自我の確立を得るための勇気ある行為であるとわれわれは考えたい。

75 Maurice Lever, *Le Roman français au XVII^e siècle*, Presses Universitaires de France, 1981, p. 219.

76 Op. Cit., p. 334.

『クレヴの奥方』よりの引用文の和訳は、生島遼一教授訳『クレヴの奥方』、岩波文庫、1976、を用いた。

原稿受理 1985年4月30日